

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 森脇愛子

抑うつは臨床場面で多くみられる現象であり、そのメカニズムの解明と介入方法の開発は大きな意義を持っている。本研究は、対人行動とりわけ自己開示という行動が、抑うつの発生にどのような影響を与えるかについて、体系的に検討したものである。本論文は7つの研究からなるが、大きく三部に分けられる。第一部（研究1と研究2）は、大学生における自己開示の現状を調査し、自己開示を測定する尺度を作成したものである。第二部（研究3～研究6）は、抑うつと自己開示の関係についてモデル化をおこない、調査および実験をおこなって、そのモデルの妥当性を検討したものである。第三部（研究7）は、抑うつを弱める介入を行うことによって、モデルの妥当性をさらに確認したものである。

第一部の研究1では、大学生の自己開示の頻度や相手などについて調査し、その基本的な特徴を明らかにした。その結果にもとづいて、研究2では、自己開示の開示法と被開示者の反応を測定する尺度を作成し、その因子構造を調べた。その結果、適切な自己開示は「文脈等配慮」「聞き手選択」「時間および場所選択」の4因子からなり、不適切な自己開示は「聞き手」「聞き手の状況」「ネガティブな感情価」「回数(繰り返し)」の4因子からなることを見いだした。また、被開示者の反応について、受容的反応は「真剣な姿勢」「アドバイス」「親身な行動」「共感」の4因子からなり、拒絶的反応は「否定・無視」「無関心」「真剣味の無さ」「少ない反応」の4因子からなることを見いだした。さらに、各因子にもとづいて下位尺度を作成し、その信頼性と妥当性を確認することができた。

第二部では、自己開示の開示法、被開示者の反応、開示者の抑うつという3つの要因についての因果モデルを作成し、縦断調査（研究3）、ペアデータ調査（研究4）、実験（研究5と研究6）などの方法を用いて、因果モデルの妥当性を確認した。研究3では、研究2で作成した自己開示の開示法と被開示者の反応の尺度を用いて、大学生に縦断調査をおこない、そのデータをパス解析を用いて分析した。その結果、モデルの妥当性が確認された。すなわち、適切な自己開示を行うほど被開示者から受容的反応を引き出しやすく、その受容的反応が開示者の抑うつを低めることがわかった。逆に、不適切な自己開示を行うほど、被開示者から拒絶的反応を受け、その拒絶的反応が開示者の抑うつを高めた。

研究4では、ペアデータ法を用いた。大学生の友人同士2名ずつのペアを被験者として、一方の被験者（開示者）の自己開示が、他方の被験者（被開示者）にとって適切であったか不適切であったかを調べた。こうした方法によって因果関係に踏み込んだ分析が可能となる。その結果、モデルの妥当性は再び確認された。すなわち、開示者の自己開示を適切であると捉えたとき、被開示者は受容的反応を示し、それによって開示者の抑うつは低く

なることがわかった。逆に、開示者の自己開示を不適切であると捉えたとき、被開示者は拒絶的反応を示し、それによって開示者の抑うつは高くなった。

研究5では、実験的方法を用いてモデルの妥当性を検討した。ここでは、被開示者の反応（受容的か拒絶的か）を実験的に操作し、それが開示者の抑うつ感情を高めるかどうかを検討した。その結果、被開示者から拒絶的反応を受けた開示者は、開示前よりも開示後で抑うつ感情が高くなっていた。逆に受容的反応を受けた開示者は、開示前よりも抑うつ感情が低くなっていた。この結果は、上述のモデルからの予測と一致する。

研究6では、被開示者から拒絶的反応を引き出しやすい自己開示はどのようなものかを検討した。不適切な自己開示の4つの要因、すなわち「聞き手」「聞き手の状況」「ネガティブな感情価」「回数(繰り返し)」を操作し、被験者に一定の場面を想像させた。そして、そうした不適切な自己開示に対して、どのような反応をするかについて答えさせた。その結果、これら4つの要因はすべて有意に被開示者の拒絶的反応を高めた。すなわち、研究3で得られた不適切な自己開示の4要因は、たしかに被開示者の拒絶的な反応を誘発することが確かめられた。

第三部の研究7では、不適切な自己開示に対して介入し、それによって抑うつが弱まるかどうかを検討した。自己開示の開示法に対する介入を行い、介入をおこなわない統制群と比較した。その結果、4週間後に介入群は介入前と比べて抑うつが弱くなった。統制群ではこのような変化はみられなかった。

なお、以上の研究の実施にあたって、倫理的な配慮は十分になされていると確認された。

本論文においては、とくに次の諸点が高く評価された。

- 1) 自己開示の開示法と被開示者の反応について、統合的に測定できる尺度を作成し、その信頼性と妥当性を明確にするなど、質問紙データの信頼性を高めるために細心の注意を払い、また、3000人に及ぶ多数の調査データを積み重ねて、実証的な議論を組み立てていること。ここで作成した尺度は、これからの自己開示の心理学研究で使用できるツールであり、この分野の研究の発展に寄与するところが大きいこと。
- 2) 自己開示の開示法や被開示者の反応を含めた体系的な抑うつモデルを提示し、縦断調査やペアデータ、実験、介入法といったさまざまな手法を用いてその妥当性を検証し、それに成功していること。
- 3) こうした実証研究を積み上げることによって、抑うつの治療や早期介入に役立つ確実な情報を提供したこと。

これらの成果により、本論文は、博士（学術）の学位に値するものであると、審査員全員が判定した。

なお、研究2はすでに「性格心理学研究」誌上に掲載済みであり、研究3は「カウンセリング研究」に掲載が決定している。